

パネルディスカッション・質疑応答

パネリスト

釈 徹宗

新川 泰道

金子 昭

前田 伸子

木村 清孝

尾崎 正善

司 会

司会

パネルディスカッションの司会を務めさせて頂きます尾崎でございます。よろしくお願いいたします。それではさつそく、パネルディスカッションに入らせて頂きます。先ず発表頂いた先生方それぞれ、まだ言い足りなかつたこと、それから他の発表者の方のご意見などを聞いた感想等ございましたら、順番にお話し頂ければと思います。最初に釈先生よろしくお願いいたします。

釈

先生方のご発表といえますか、ご講演を聞いてやはり、改めて東日本大震災が一つのエポックとなっているというのを実感いたしました。ただ私のように関西人にとっては、阪神・淡路大震災が宗教者の社会参加の大きな機縁になったという実感があります。阪神・淡路大震災の時は、まだ宗教者の活動も成熟してなくて、スキルも甘い部分がありましたし、マスコミもそれほど各教団を報道したり取り上げたりすることはありませんでした。今回、東日本大

震災での各教団の機動力は、阪神・淡路大震災から始まり、その後の中越地震とか、各地の大きな災害などに取り組んできた結果だと考えています。また今回はいつもよりメディアが伝統仏教教団の活動を取り上げたという面があります。どうして今回そんなに積極的に取り上げたのか。理由はいくつかあります。全部お話しする時間はありませんが、一つ言えるのは、人間はなすべがない限界状況におかれると、伝統的な知恵に耳を傾けようとする態度が強くなるというのがあります。東日本大震災の後、『論語』がすごく読まれたり、『方丈記』が再出版されました。それも増刷が繰り返されました。ピンチの時に伝統的な知恵に耳を傾けようという態度は、人間の危機管理の在り方としては真つ当ですし、その判断は間違っていないと思います。これにいかに対応していけるか、何ができるか。

これまで日本のお寺は地域コミュニティーの上に乗ってやってきたのですが、今、この地域コミュニティーの形が変わっている。あるいはそれまで伝統仏教教団が支えとしていた葬儀、法要、墓といったものの形が変わっている。言わば好むと好まざるとに関わらず、日本伝統仏教教団というのは曲がり角に來ているわけです。だからこそ、今、日本伝統仏教教団に注目すべきであり、だからこそ出来ることがあると思っています。

司会 ありがとうございます。続きまして新川先生、よろしくお願いたします。

新川 先ほどは少し駆け足な話で、大変失礼いたしました。改めて今日のシンポジウムのお題が目にとまりまして、「心の安らぎを求めて」ということなのです。心の安らぎって何なのかということをもふと思った時に、悩みが何もない状態が心の安らぎなのか、というように受け止められがちかもしれませんが、たぶんそうではないと思うのです。度々、仏教用語としてもお説教の中でも生老病死といいますが、いろいろなトラブルや苦難が人生の様々な場面で起きうるわけですね。そんな時でも安心して生まれて、安心して年をとって、安心して病気になるって、

そして安心して死ぬる。いろんな苦しみとか辛いことを排除して、それこそ釈先生のお話にあったように、合理的な世の中を目指すというのではなく、非合理や不条理なことがいっぱいあるからこそ、一見逆説的ですが「安心して悩める」世の中、人生における苦難を前提とした上での「心の安らぎ」というものをもう一度私たちは目指していかなくてはならないのではないかなと考えています。フィールドがたとえばターミナルケアや災害であったり、もしくは地域の過疎化とか人口減少に伴う様々な問題の中でも、そのことを考えていかなくてはと思います。

今日は臨床宗教師ということもテーマになっています。公の場でお名前を出すことはご本人から許可を頂いてないので、とある著名なお坊様とだけ言っておきますが、以前伺ったお話で最近「臨床美術」という言葉があるそうです。病院とか福祉施設に飾っておくと、人を癒すとか、気持ちやすつきりするという絵や彫刻であったり、そういうジャンルがあるのだそうです。その著名なお坊様は、そういうことを目的に描かれた絵や彫られた彫刻が、本当に人を感動させられるのか、と少し嫌味っぽいことを言われていたのですね。私は今回の鶴見大学や先制医療センターの取り組みに決して茶々を入れる訳ではないのですが、ともすれば臨床という、何か良かれと思っただけのこと、これが誰かの助けや救いになるのではないかとということとは同時進行で、やはりお坊さんとしてのあるべき様といますか、何かそういう本質的なものをさして置いて、効果を得られやすいものに目を奪われ過ぎないということについても考える必要があるのではないかと、自戒の念を込めつつ、大変僭越ながら余計な一言を付け加えさせて頂きました。

司会 ありがとうございます。それでは続きまして金子先生、よろしくお願いいたします。

金子 私は、三点ほど申し上げたいと思います。一つは、先ほど新川先生が触られましたけれども、心の安らぎを求め

てという、このシンポジウムのテーマと仏教者の社会参加ということは、どうも最初は形容矛盾といえますか、合わないような感じがいたしました。なぜかと申しますと、社会参加すると必ず心が乱れてしまうのですね。本当は閉じこもった、人里離れた静謐な空間の中で修行して心を澄ませることによって落ち着いていくものなのですが、社会に関わっていく、人と交わっていくと本当に俗世間のことが次から次へと入ってきて、自分自身も巻き込まれてしまうわけです。これは心の安らぎと正反対になってしまっているのではないかと思つたのです。ところが、新川先生も少し指摘をされましたが、苦難やトラブルがあることによつて、それを契機に自分が逆に、宗教者、仏教者であるならば、この世の中を超えた神様、仏様、あるいは大自然なるもの、大いなるもの、something great など、いろいろな言い方がありますけれども、そういう大きなものと繋がることによつて、実は逆に本物の安心感を得られるのではないか。そういう本物のところで安心感を得るのであれば、この世の中は山あり坂あり、「まさか」という坂もあるわけですが、そうした人生の坂道を乗り越えられるのではないかと思つたりしました。

二点目なのですが、釈先生と同じように私も関西人なのです。東日本大震災というのは本当に大きな出来事でありましたけれども、日が経つにつれて関西に住んでいると、だんだん遠い世界のように思えてしまうことも現実としてあるのです。それでも常に心がけて何らかの形で繋がりを付けたいと思つております。

阪神・淡路大震災の時は、もちろん宗教者の活動も非常に盛んで、おそらくほとんどすべての教団、ほとんどすべての寺院、教会、あるいは宗教者個人で何らかの救援・支援活動をされたと思います。そしてメディアもまた、そうした宗教の諸活動を報道しました。

ところが、東日本大震災では何が変わつたかという点、宗教者や宗教教団の横のつながりができたということなのです。いろんな形で行われました。臨床宗教師の発端もそこにあつたと思うわけです。東京でも、東京大学（当時）の島菌進先生が自ら、宗教者災害支援連絡会というものを立ち上げました。いろいろな宗教

家の方々がいるのだけでも、どの宗派の方が音頭を取ってやっても、他の宗派の方がなかなかついていきにくいだろうということで、宗教学者が音頭を取って、そうすると割とつながりやすいということもあったのです。そして、宗教間協力をしながらお互い情報を提供して、どういうつながりが支援において可能なのかという横のつながりが、東日本大震災においてはじめて本格的な形で出来たのではないかと思っております。

三点目です。この場にもたくさんの方々の修行者の方々がいらっしゃいますね。実は私もここへ来る前に大本山總持寺に参拝をさせて頂きました。拝観受付にお願いをしまして、ボランティアの方に一時間半をかけて、たいへん丁寧にお話を聞かせて頂いたのです。歴史的由来からはじまって、修行僧の方がこういうふうに修行しているのだということまで、詳しくお話をさせて頂きました。

私は、そういう修行僧の方を目の前にして言うのも、ちょっと恐縮なのですけれども、やはり在家の方もいらつしやると思うのですね、そして一般の方もこの会場にいらつしやると思っています。そういう在家の方、一般の方、臨床宗教師のグループの中にも僧侶の方が受講生として入っていらつしやれば、立正佼成会、真如苑とか天理教とか、天理教の場合は仏教に入りませんけれども、そういう方もおられます。いわゆる職業として宗教家でない方、私はそういう人も宗教者であると思うのですが、そういう方にとつての社会参加とは何だろうということを考えるのです。質問用紙にもそういうことが触れられておりましたけれども、もし、釈先生や新川先生に聞かけるとすると、そういう在家の方、檀家の方にとつての宗教的社会参加についてお伺いしたいと思っております。

司会 ありがとうございます。最後になりましたけれども、前田先生よろしくお願いいたします。

前田 新川先生がおっしゃいました、臨床という言葉というのが、実際私たちもその名前を使って始めたのですが、

うまく置き換えられない言葉なのです。ホームページなどのために英語のバージョンを作ろうと思うと、全然当てはまる言葉がないというので、むしろ engaged という言葉になるのかなと思ったりもしたのですが、それでもまだちよつと違つと。実は臨床宗教師という言葉と臨床仏教師という言葉と二通りあつて、その二通りで別々にやつておられる二つのグループがあるそうです。実際にはこの前、臨床宗教師のフォーアツプ講習会に参加させて頂いたのですが、その場では臨床仏教師を育成している方たちも一緒に連携を取りながらやつておられるようなのですが、実際始めてみたら思つたことは、修行僧の方たちの多くの方がご自坊にお帰りになるのかなと思つてはいるのですが、やはり、病院や施設に入つてお仕事をすることゝことが途中であつたとしても、実際には自分の地域に戻られた時に、その地域におられる方たちにとつての支援をするという立場が一番大きなお仕事になるのではないかと。そうすると、私たちがやつていこうとしているものは終末期医療、あるいは臨床宗教師という言葉を使つてはいるのだけれども、それに特化せず、それこそ社会の中で行き所が無くなつてはいる方たち、あるいは今、いろんな言葉がありますが、無縁社会とか犯罪に手を染めて何も怖くない無敵の人だとか、そういった言葉があるので、そういった方たちをくい止める、あるいは力を添えてあげられる、あるいは本当に寄り添つてあげられる。そういったことの手助けを出来るようなことにつながつていければと思つております。今後、曹洞宗の方で、施設だの病院だのを持つて、もしかすると臨床宗教師として活躍いただく方も何人か育つていくかもしれません、あまりこだわらずに、もう少し大きなところで活動が続けられればよいと思つています。

実は、釈先生のむつみ庵を見せて頂きに行つたのですが、おられる方たちが本当にまるで自分のお家のように過ごしておられるという姿を見て、最後に一人きりになつても、こういうところでお仲間がいて過ごせたらいいなと思ひました。ただ、本当にそのままのお家を使つてらつしやるので、すごく難しい、いろんなところで法的

なことで言われると難しいところがあるのだろうなと思ったのですが、ああいう形のグループホームが一つでも二つでも出来ていけば、例え孤独であっても寄り添って最後は過ごせるのかなと思ひ、素晴らしいと思ひました。

司会 ありがとうございます。続いて木村先生お願いいたします。

木村 私から一言、今回のシンポジウムのタイトルについて話題になりましたので、タイトルを付けた立場にある一人として、すこし補足的にお話をさせて頂きたいと思ひます。「心の安らぎを求めて」という主題ですけれども、心の安らぎがあるかないかとか、それが実現できるのかということではなくて、否応なく私たちは心の安らぎを求める存在であるという事実を率直に捉え直してみたいということが基本的な狙いでした。

もう一つは、その心というものについてですけれども、仏教の教えに即して言えば、他者の心の安らぎがなければ、自分の心の安らぎもないですね。だから心というのは、とても広く大きい。自分の心と他者の心は深いところでつながっている。心のつながりこそが基本なのです。他者の心まで含めた心の安らぎを求めるといふこと、そのありようがどんなものなのか、それに対し私たち仏教者、宗教者がどのような形で関わっていけばよいのか、という問題意識です。私自身は、その一つの方向性として社会参加が不可欠なのではないかと思ひております。今こういう「モノ」と「カネ」中心の時代になって、そこをすこし詰めて、一緒に考えるようなシンポジウムができればありがたいということがありました。この点をご理解頂いて、この後、質疑応答、ディスカッションが展開していくとありがたいと思ひます。

司会 ありがとうございます。僧侶の社会参加ということをごさひまして、本日お集まり頂いた先生方は、文字通

積

り積極的に社会に出て、その関わりの中で活躍頂いているわけでございます。それでは、最初に積先生、よろしくお願いいたします。

それでは先に私からお答えいたします。金子先生もご存知のように、真宗教団というのは、そもそも出家者はいなくて全員在家者です。あまり僧俗の境目というのは強くなく、たとえばビハーラ研修会にしても僧侶だけでなく、ごく一般の在家者、いわゆるご門徒の方々も参加されますし、むしろご門徒の方のほうが有名な先生が多くて、僧侶の研修会でもご門徒の方の取り組みを講師で招いてお話を伺ったりします。このあたりは、宗派の特性だと言えるでしょう。

また、老病死というのは特定の人を取り組んだり、専門家だけでどうにかするといふ問題ではなくて、金子先生のお話にあつたように、全人的に関わる方向へと進むべきでしょう。例えば私は、三つくらいのチームワークといいますが、そういうのをイメージしているのです。

一つはやはり医療関係者の関わりが必要ですので、チームAが医療関係で、医師、看護師、薬剤師等と考えますと、チームAは evidence based medicine です。エビデンスを基にした関わりをします。チームBはカウンセラーとかソーシャルワーカー、あるいはスピリチュアルケアといった臨床心理士もおそらく、このチームBのカテゴリーかなと思つていられるのです。で、チームCが地域とかNPOです。このチームB、チームCは narrative based medicine で取り組む。こんな風なイメージを持っています。

これはなにも、サービスする側・サービスを受ける側に分かれてケアするという話ではありません。自分自身がグリーンフとか終末に向かつて取り組んでいくということであり、その取り組みへの支援です。ですから、グリーンケアというよりも、グリーンワークの方がよいのではないかと思つていられるのです。医療関係とか宗

教者がサービスを提供する側、自分がサービスを受ける側の消費者というのではダメなのですね。消費者体質を変えるためには、自分自身がその死と向き合って取り組んでいくというような、態度が重要です。そのグリーンワークをするための三つのチームのカテゴリー。そういつたことを考えております。

司会 ありがとうございます。金子先生のご質問に対して、新川先生、実際の現場も含めてどのように取り組んでいるかですね。

新川 私からすると、たとえば天理教さんのひのきしん隊という、自衛隊か何かの一個小隊といってもよいくらいの統率のとれた宗教者というか、お坊さんとか神父さんとか神主でもない、信者さんも交えた組織が活動なさっているのを度々目にして、素晴らしいなと思っています。

確かに曹洞宗に関して言いますと、僧俗のけじめや線引きというのか、ある程度は必要というのがあるのかも知れないのですが、今回の被災地支援に関しても、男女や、職種といったところを超えて、共同作業が行われてきた場面が多々ありましたし、女性や異業種の方々にも大いに助けられました。それは布教のためにやっている活動ではなく、ある社会的な目的を共に作業していくという中で、僧俗のけじめということを一旦踏まえつつも、そこに同じ目的を持つ者が活動していく上では、あまり私は意識していないところです。そして同時に、私達がどんなにTシャツや作業スボンだったとしても、何かの拍子にお坊さんとして見てくれているという、これまた何とも不思議な、ありがたい場面だなと思うことがあります。もちろん私たちは、お袈裟のありがたみとか意味というものを一方でちゃんと受け止めつつ、あるいはそれに頼らないところでの、一人の坊さんとしてどうあるべきかが試されるのも、このような社会参加という問題の中では大事な問いかけではないかなと改めて思いました。

司会

どうもありがとうございました。続きまして、会場から大変たくさんのご質問を受けております。すべてにお答えすることは時間的にも無理ですけれども、最初に釈先生に、何人かの方からご質問がありました。むつみ庵についてでございます。まず、立ち上げるにあたって一番最初にしたことは何ですか。そして、今のチームワークの話の中で出たかもしれませんが、病気や怪我をした場合の病院との連携をどのようにしているのか。それから、これはちよっとお答えにくいかもしれませんが、実際に運営していく上での年間予算とか人件費とか、より具体的にありますが、実際に運営していく上での一つの指針という形でお答え頂ければと思います。

釈

まず最初にやったことは、NPOの立ち上げでした。とりあえず運営母体をどうしようかと考えました。寺院がやるという選択もあったのかもしれませんが、できるだけ誰もが活用しやすいのがNPOではないかということ、NPO法人を立ち上げました。その次がむつみ庵という建物を事業所として認可してもらう、これについて随分苦労したという感じです。

病気になった時なのですが、ちよつと地域にご高齢の医師がおられます。医院の方はほぼご子息に任されている開業医の先生でして、この先生はむつみ庵の活動に共感してくださっているので、その先生に日頃から相談をしていますし、診て頂いております。看取りの時もこの先生の指示を受けながらやっていきます。また近くに訪問看護ステーションがあり、訪問看護を活用します。訪問看護の活用と地域のお医者さんの理解、これなしにはちよつと看取りまでするのは無理です。むつみ庵には医療能力は全然ありませんので、自分のところだけで出来ることは本当に限られています。そういう意味では、意外と地域に医療資源は眠っているのですね。結婚してから勤務をやめた看護師や一線を退いたお医者さんとかが結構いるものです。そういう地域の眠っている医療資源を掘り起こして、手伝って頂く。

実は私にアイデアがありまして、「地域の眠っている医療資源を呼び覚まして、お寺とチームワークを組めば、その地域でいろんな取り組みが出来るのではないか」と思うのです。お寺というのは地域の事情にもものすごく詳しいものですから、すぐにでも地域にアクセスできる。それに地域の医療資源を組み合わせるのはどうかと考えております。

もう一つのご質問は運営ですね。年間予算が三千二百万くらいあります。収入の大半が介護保険です。ですから私はまるつきり素人で始めたのですけれども、私の実感として、今の介護保険制度が崩れない限り、素人でも運営はそんなに難しくないとはいえます。運営側があまり儲ける気さえ無ければ、スタッフにはちゃんと給料が払えます。支出の大半はやはり人件費ですね。むつみ庵は現在七名で暮らしておられるのですけれども、ワンユニットで九名まで暮らせる法律で決まっています。定員いっぱい九名の方が暮らしていると、ウチは年間百五十万位のストックが可能です。八名でぎりぎり、七名だとちょっと赤字が出るという感じです。ですから、九名暮らしている時にストックを出来るだけ残しておいて、利用者のためにお風呂を改造したり、新しい法律でスプリンクラーを付けたら、年々スタッフの給料を上げていったりという風にやっております。

司会

ありがとうございます。続きまして、新川先生への質問ですが、二点あります。二十年の経験で宗教者イコール死というイメージが崩れなかったのか、また死のタブーにまつわるいろんな問題点があれば具体的に教えて頂きたいというのが一点。それから先生は失礼ですが、学生時代からそういう支援活動をなさっていたのか、ということ。そのモチベーション、それを続けていく心構えといいますか、この方の質問を察するに、では自分でやる時にどういう心持ちなのか、それを参考にしたいという意味なのではないかと思えます。この二点をお聞きしたいと思います。

先ほどもお話しましたけれども、病院内でということに関していうと、まだまだお坊さんの服装のままスツと行けるかというところ、ハードルが高いということがあります。十一年前に亡くなった私の師匠が入院中、着替えを届けたりという時に私も度々僧衣のままで行かざるを得ない時もありました。病院の方々を驚かせる意図はなかったのですが、最初「びっくりした」なんて言われるのですよ、ナースの方に。時々こういう格好で来るからびっくりしないで下さいねと、笑って言い合える関係が出来てくればいいのじゃないでしょうか。

私どもの活動に賛同して下さった、ある総合病院の院長さんがおられて、うちの病院で定期的に何かやってくれという話になりかけたことがあったのです。ところが、その院長先生が代わってしまった、その話を事務長さんに言ったら、院長さんレベルではOKでも事務長さんレベルだと、うちの病院に坊さんがうろうろされるのは困ると言って、そのお話が立ち消えになったということがあります。なので、要は人間関係を築いていく中で、あの人だったら何か頼めるなとか、何か任せられるなとか、そういうことを一つずつ積み重ねていくしかないのかなと思います。

もう一つが、被災地支援に関して言いますと、学生というか、現在の総合研究センターという、当時は教化研修所と称していましたが学生と職員の子みだいな立場の時に阪神・淡路大震災があり、私は東京にいます。東京から夜行バスで神戸に行ったのが最初であります。正直に言うと、一番最初は野次馬根性でした。決して熱いボランティア・スピリットで出掛けたということではなくて、言ってみれば歴史の教科書に載るかもしれないような、あれだけの場面を一度見ておきたい、空気に触れておきたいと思ったのが正直なところです。しかし、度々今日のキーワードとして出てきている地域のあり様だとか、助けられ上手というお話がありましたけれども、自分が何かをし、誰かを助けるといっても、自分も何かあった時に助けてほしい。では、自分が助けられるためにはどういうことを学んで、どういう人と友達になって、どういう知恵をつけ

ておけばいいのかという点を阪神・淡路大震災で強く考えさせられました。それが最初のモチベーションです。そこから後は「くされ縁」です（笑）。

司会

ありがとうございます。今、助けられ上手というお話がありました。金子先生への質問の中にもそれがございました。積先生はお世話され上手と、やはり同じようなキーワードでしたけれども、まず、助けられ上手とは具体的にはどういうことなのか、具体的に自分で実践する、受ける側として、また助ける立場にたつてということでしょうか。そういつたことはどうでしょうか。これとも関連すると思いますが、垣根を越えるという言葉がありました。垣根を越えるために一番大事なことは何でしょうか。二つの質問ではございますが、関連した積先生と新川先生のご感想とも重複するかもしれませんが、金子先生よろしくお願いいたします。

金子

ご質問ありがとうございます。助けられ上手の具体的な事例というのが、今急には思いついて来ないのですが、ただ、助けられたい人がいるのですね。その一方で助けたい人がいるわけです。ところが、その二人が出会わないのです。その出会いの場をどのようにして作ったらいいのか、そこに何か私たちが日常生活の中で張り巡らしている「垣根」があるのではないかと考えております。でも、垣根と言った時に実は私たちは、何が垣根か分かっていないことが多いのですね。ここまで言っているのだろうか、ここまで踏み込んでいいのだろうか、いつも迷っています。私たちは普段よく経験するのですけれども、よその子供をなかなか叱れないというの、やはりその垣根の一つなのかもしれません。

慈済会の例を一つ挙げたいのですが、慈済会は東京の東新宿に日本支部があります。そこには日本語のよく出来る慈済会のメンバーがおられます。しかし、東日本大震災の支援活動では台湾から来た人たちが非常に多かつ

たのですが、日本語はほとんど出来ないと思います。ところが、彼らが一番最初に行ったのが老人ホームだったと思うのですが、そこに自分たちで作っているリサイクルの毛布を持って行きました。電気も消えて水道も止まって寒さで凍えているお年寄りたちを抱きしめて、言葉は全然通じないのですけれども、とにかく「寒くて大変でしょうけれども頑張つて下さいね」というようなことを言ったのです。聞いている方も、何を言っているか分からないけれども、たぶんそういうことを言っているのだろうと思つて、わざわざ遠い台湾から自分のためにやつて来てくれたのだと、涙を流して受け入れてくれました。そういうエピソードがあります。

つまり、垣根というものは逆に何なのだろうか。それに囚われることが実は垣根になっているのではないのか。そういうことをあまり考えずに、この人が待つているのだから手を差し伸べればよいと思つたら、手を差し伸べる。結構ですと言われれば、すみませんと謝ればすむだけの話です。私たちができるだけ自分の身の周りにアンテナを張つて、自分たちが助け、また助けられる回路を作っていくことが大事です。

司会

どうもありがとうございます。最後に前田先生への質問ですが、医療関係者がスピリチュアルケアの方法を学んで寄り添い人になる、というのは不可能でしょうか。これは私が答えることではないかもしれませんが、可能だと思います。ただ、その後に宗教者だから、仏教者だからこそ出来ること、そういうこと。今、ご本山の修行僧もいらつしやいますけれども、やはりその特性もあると思います。そういうものを、まだ一回目という事で方向性が見えてない部分もあるかと思いますが、前田先生はどのようにお考えなのか。宗教者としての寄り添い人の特性といえますか、可能性についてお話し下さい。

前田

臨床宗教師のフォロワーアップ講習会というものがございまして、そちらに参加した時、本来ならば私は臨床宗教師の講座を受けていませんので、第一部の報告会だけで、後は参加できないというはずだったのですが、協賛し

ている団体ということで、ワークショップにも参加させて頂きました。私、実際には、曹洞宗はうちの大学のご本山ですし、浄土真宗のお坊さんは友達がいたりして、よく存じ上げているのですが、その他の宗派の方とお会いする機会があまりなかったというか、接点がなかったのですが、そこには実に天理教、真如苑、金光教、ありとあらゆるというか、イスラム教の方も含めているような方がいらっしやったんですね。その時に感じたことは、宗教的なバックグラウンドは何であっても、高木先生がいみじくもおっしゃった、大いなるものの存在を信じて、それにすがるということも分かっている方たちは全然懐の深さが違うのかなど。さっきの、助け上手、助けられ上手ではないですが、自分を任せるということが出来るのが宗教者のスタンスなのではないかと思いました。

医療者でも出来る、尾崎先生が言って下さいましたが、人と関わっていく仕事は医療者も、あるいはカウンセリングの方も同じで、人と関わっていく、そして大いなるもの、人間を超えた存在を信じられるということがあると、その積み重ねでいろんな経験をしていくと、非常に深いスピリチュアルなどの痛みも癒すところまでいかなくとも、理解して包んであげて、そばにいても邪魔にならないとかいうことで、安らぐということが出来るのではないかと思いました。

私は宗教者ではないと思っていたのですが、木村先生とお付き合いするようになってから、仏教に限らず様々な宗教の方のご本を、いろいろな乱読というような形で読んでおきまして、大いなるものの存在というか、今、非常に仏教に魅力を感じています。フォロワーアップ講習会で特別講演をされた久保寺先生に、何か大いなるものの存在を信じられるということが、宗教者であれば、私でも自分を宗教者という風と呼んでもよろしいのでしょうかということをお聞きしたら、十分自信を持って宗教者と言って頂いてよろしいのではと言っていました。特に今、この会場にいらっしやる修行僧の方々とか釈先生、新川老師のような立場でなくても、宗教者ということはありませんが、それを信じていることが人を助ける時に、人に寄り添う時に力になるのではないかと思えます。

司会

どうもありがとうございます。まだまだたくさん質問がございませうけれども、閉会の時間が迫つてまいりました。ここで、先ほどもご紹介いたしました、木村清孝先生より、本日のシンポジウムの総括も含めて、ご意見を賜りたいと思います。よろしくお願いいたします。

木村

皆様、本日は長時間に亘りまして、ご参加、そして一緒に大事な問題を考えて頂きまして、本当にありがとうございました。私も今日はいろいろな意味で啓発されるところがたくさんありました。最後にあたりまして、それぞれのご発表で、私が特に印象深くございますか、これはぜひ皆さんと共有したいと思う点を一つ位ずつ申し上げ、閉会の言葉に代えさせて頂きたいと思ひます。

まず、その前に先ほど今回のシンポジウムの主題についてお話をさせて頂きましたけれども、最後に、前田先生からお話があった「仏教者の社会参加」ということですが、この場合の仏教者は、私自身の用法では別にお坊さんだけに限つてゐる訳ではございませぬ。正しくしっかりとした信心があり、修行されている、そういう方々であれば、道俗を問わず、本当の仏教者です。宗教者全体もそのように考えるべきではないか。単に神父さんや宮司さん、お坊さんだけが宗教者であるというふうに捉える必要はない。特に、日本仏教は根本的には、道俗一体の世界です。現在でも中国、韓国の仏教は出家者と在家者がかなりはつきりと分けられています。そういう世界ではないのです。

さて、先ほど申し上げましたが、それぞれのご発表について、本当に強い印象が残つております。まず、最初の釈徹宗先生のお話ですが、具体的な場で素晴らしい活動をされているということがよく分かりました。そして現代の宗教といひますか、福祉行政に対しても非常に問題があるということを具体的に提示して頂いたように思ひます。ぜひ、この活動をさらに進めていって頂きたいですが、具体例で挙げて頂いた生前個人墓のこととか檀家制度はマイナスだけではないということで、私自身も住職をしておりますので、非常に啓発され、考えていく必要があるという思ひを強くいたしました。また、先ほど話題になりましたが、世話され上手、助

けられ上手というあり方、この点はやはり私たちが助けるといふことになる、ちょっと間違えば上から目線になりがちです。そういう方向で考えるのではなくて、一緒の場といえますか、これは仏教の慈悲の心にそのまま通じるわけですが、そういうところからこういった問題を考えてみる必要があるのではないかと思います。

それから新川先生のご発表にもいろいろ感じるところがあったのですが、一つ、ビハーラカフェの話がありました。思い出したのは、松原泰道先生らが始められた「南無の会」のことです。一般の在家の方々を対象にしたいいわゆる説法の会ですが、現在はどうもここまで踏み込んだ活動にはなっていないような気がするのです。そういった活動をもう少しビハーラカフェのような方向に進めることができなにか、あるいはそういう活動とこれをリンクさせることができないうかという思いを強くした次第です。

もう一つ、傾聴のことについて疑問を呈されました。これは実は前から私も気になっていたことです。日本はすでにかなり進んだ情報社会になりました。何か一つのこと注目されますと、それがネットを通じて一気に広がります。そうすると、その情報が独り歩きしていきます。傾聴の場合でもそうで、それがもつ本来の意味とか位置づけがどこかへ飛んでしまつて、流布した形の傾聴だけが大事であるような方向になつてしまふ。こういったことには私たちは十分警戒をして、しっかりと自分の心で受け止め直して、あるべき姿が何なのかということを見ていく必要があるのではないかと思います。

金子先生のお話ですが、私もついこの前、台湾に参りまして慈済会の病院を見学してきました。本当に素晴らしい活動をされております。日本の仏教ではとても真似できないと思うような中身があるのです。先生ご自身のお考えとして、これからの社会を結縁社会へというご提言がございましたけれども、私自身は「共生」から「共成」へということを十年以上前から説きすすめてきました。語呂合わせのような感じですが、共生の共生から、共に成す、そして共に成る（仏教の言葉を用いれば、「菩薩」的な存在となる）ことで、先生

とたぶん中身としては同じようなことなのかと感じます。これからもう少し親しく議論をさせて頂く、そして何か一緒に出来るものを見つけていくことが必要なのではないかと思います。

前田先生とは、親しくお付き合いさせて頂いております。今回のご発表の中身についても、一度事前にお伺いする機会がありました。その中にとても素晴らしい点がいくつもありました。その一つは、前に高木先生のお話に出てきた「悲しみから思いやりへ」ということで、これがとても大事なポイントだと思います。ビハラの問題もそうで、ビハラの概念を、私どもは少し広げて考えています。たとえば癌を宣告されて、死まであと何か月みたいところで切つてはだめだということ、もつと生死を徹底した、生死を超えた場をベースに置いたビハラ活動になるべきではないでしょうか。現在のビハラという概念は、パーリ語でいう *paṇṇa vihāra*、安住と訳しますが、それから来ているのだと思います。それが基になっている言葉なのですが、そういうところを押さえながら、具体的な活動を展開する。寄り添うというのが重要なキーワードですが、そういう活動が曹洞宗内でも一つの大きな柱になっていけばいいと考えております。

先ほどの悲しみから思いやりへ、これをぜひ若い皆さん、修行僧の皆さんに心してほしいのですが、深い悲しみの体験、これがないと本当の思いやりというのは、私自身もそうだったのですが、やはり生まれません。無理にそれを求めるわけにもいきませんが、寄り添うことを通じて深い悲しみの体験に共感することはできると思っていますので、それを心がけて、これからさらに修行を続けて頂きたい、これからの道を歩んで頂きたいと願っています。

いずれにしても、今回大変貴重な、しかも意義深いご発表をそれぞれの先生から頂戴しまして、主催者側の一人としまして本当にありがたく思っております。こういう場合は、話す側と聞く側の両側からの共同の在り方として成立しますし、意義あるものとなっていくものです。最後に改めまして、心から本日のご参加頂いた皆様にもお礼を申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。本当に皆様ありがとうございました。